

(図書紹介)

田中萬年著 『生きること・働くこと・学ぶこと—「教育」の再検討—』

齋藤健次郎 (文星芸術大学)

田中氏の意欲溢れる著作である。氏の研究分野からすれば、脇の方で想いを相当暖め、練りあげて書き上げたような文章である。それだけに、文章は激しく、決め付けも厳しい。サイドワークの気楽さで、筆が走ったというところもあるかもしれない。力を入れて書いているが、文章の流し方は随筆的である。このような印象を受けたのは、第1章の表題が「明治の親達はなぜ学校を焼き討ちしたか?」という刺激的なものだったからである。この事実は九鬼隆一文部省大書記官の報告書あたりが背景となる一般的な状況を説明しているが、教育史では、あまり取り上げられていない。これを起爆剤として本書は11章から成っているが、中心は第2章「教育」は中国語か?というのと、第3章「教育」は Education か?という二者であり、その他の章は「応用問題」であるというように、私は受け取っていた。しかし、良く考えると、どうもそうではないと言うことに気付いた。私は、第1章の激しい見出しに幻惑されていたのである。それについて論ずる前に章名を挙げておこう。

- 第1章 明治の親達はなぜ学校を焼き討ちしたか?
- 第2章 「教育」は中国語か?
- 第3章 「教育」は Education か?
- 第4章 「教育を受ける権利」は世界の共通認識か?
- 第5章 「教育」は個性を尊重できるか?
- 第6章 教育の機会は均等か?
- 第7章 「勤労を重んじる」ことは教育目的になるか?
- 第8章 教育で「生きること」を保障できるか?
- 第9章 「知育偏重」観をなぜ克服できないか?
- 第10章 「教育」類似用語はどのように生成されたか?
- 第11章 「教育」では教育は改革できない!

【この著書が書かれた真の理由は何か】

この著書が取り上げているのは「教育」の定義の問題である。第1章の章名で眩暈がして、ある感想を持ったが、良く読むと田中氏の生涯が点綴されていて、彼の生涯は、この本を書くために生きてきたような感じになった。とにかく、わが国の教育が本来の機能を発揮できない諸悪の根源は、教育の概念が間違っているためである、と言う。真に教育を改革しようとするれば、何よりも先に教育の定義を変えることが絶対の条件である、と結論付ける。

本書によって分かったことが二つある。一つは、田中氏の執拗な、飽くなき探求心である。氏がこれほど長い期間を掛けて教育の定義に関するデータを収集し続けたことに頭の下がる思いであった。二つ目は、意外にも田中氏は、歯切れの良い推論、胸のすく明快な結論を好まれるということである。

氏の眼鏡の奥の細い切れ長の目と、微笑を絶やさぬ余裕のある表情は、優しい温和な人柄を示しているようであった。しかし、論文の展開は、妥協を許さない激しいものがあった。私は、今まで知らなかった氏の性格の一面を垣間見たような気がした。

氏は、何故この論文を書いたのであろうか。私は、パーソナリティに原因を求める性格起因説に傾きかけたが、読むうちにそれは本筋ではないように思われた。私も職業教育論を長年関心を持ってきたので、教育一般と職業教育の関係に付いてはいろいろ思うことがある。私は、日本の職業教育は、教育全体の中での位置付けに問題があり、それを正す必要を感じていた。氏は、教育史を随想的に書こうとしているわけではないことが分かってきた。私もそんな想いを、長年抱き続けているが、氏の結論とは少し違う。私は、最後は、文化や社会の問題だと思う。定義の問題、教育政策の問題もあろうが、職業を社会がどのように扱うかが基本的な問題であると考えている。しかし、氏が指摘するように教育が生活や労働と結ばれていないという欠点に付いては、全く同感である。私のように、観念や慣行の原因を文化や社会的傾向性に求める文化起因説を考えれば、怒りが定義という一点に集中することはなく、万物流転の心境となる。

この本の第9章に、職業訓練校における「モノづくり」の学習は学校教育で失敗した子ども達を立ち直らせ、生活と労働の力を付与し、社会に送り出しているとして、学校教育改革の処方箋を示しているくだりがあるが、この「モノづくり」という語に、私は思い出がある。現在魅力的な語として持て囃されているこの語を冠した大学さえ登場している。それほど魅力的な語なのである。ところで15年ほど前までは「モノづくり」は非難・攻撃するときに、相手に心理的な打撃を与えるために使われる語であった。中等工業教育がまだ元気であった頃、「モノづくり」は非難・攻撃の対象であったが、中等工業教育が崩壊してしまうと、「モノづくり」の語は一旦使われなくなり、その後美しい、魅力的な語として再登場してくるのである。わずかに15年の間に、同じ言葉が価値という点で正反対の語に生まれ変わるということが実際に起ったのである。

また、同章では、科学至上主義が、教育・生活・労働の結びつきを妨げたと言う。その妨害は、私の経験では、15年ほど前まで強力であったのだ。アメリカの経験主義教育学を批判した科学至上主義を自由に論ぜられる世の中になったのだ。そう思えば事態は少しずつ改善されているようでもある。

(技術と人間、2002年4月、四六版246頁、1,400円+税)